

企画・制作 読売新聞社広告局 広告

現場から 開発の

医療・看護を

支える人たち

寝たきりの高齢者の急激な増加に対し、施設の整備、介護の増員といった受け皿づくりが急がれている。一方で、寝たきりを自立させることが先決と、その方法を確立した人がいた。具体的機器、システムを擁しての提案である。

寝たきり五十万人を歩かせることができる

寝たきりの人の多くは、足の骨折から始まる。適切な治療を行えば患部はいずれ治るものだが、そのとき臥せていた数日間が心身の状態を一変させる。足の関節の固まり、筋力の衰え、あるいは再び立ち上がることへの恐れ。動こうとする意欲は次第に薄れ、動かなくなり、また機能は衰えていく。歩ききっかけをつかみきれないまま、やがて自分は歩けないと思ひ込み、そのままズルズルと。

二〇二五年、要介護の高齢者は五百二十万人に膨れ上がる。現在九十万人といわれる寝たきりの高齢者も、そのときには二百万人を超える。近い将来その膨大な数が、人生の決められた順路のように寝たきりに陥り、社会はそれを支えるために大きな負担を背負っていく。

こうした意識と社会システムが続くことに対して、ここで反旗を翻した人物がいた。福社用具を開発するリハビリエイド(神奈川県藤沢市)の滝沢茂男さんである。

ソリ付きで安心して歩ける「動く手すり」

その歩行器とは、家庭内で使う歩行器兼シャワーいす「らくX」だ。ポイントは前の二脚に、キャスターの代わりに付けられたソリである。滑らせて進むこの歩行器は、ソリと床の摩擦で動きすぎが抑えられ、また、敷居などの低い段差もそのまま越えられる。方向転換や横の移動にも優れ、せまい場所での操作性が高い。滑りやすく不安定、段差が越えられないといった従来の歩行器の問題点が改善されている。「たとえば、骨折による寝たきりは全体の二〇パーセントを超えます。その中には病院でリハビリを終えて家に帰っても、また寝たきりに戻ってしまう人が多い。そこで動く手すりとして、家で歩いてもらうんです」滝沢さんは話す。



寝たきりからの自立を可能にするソリ付き歩行器

この数字は、開発にあたって神奈川県茅ヶ崎市の長岡病院で使ったとき、寝たきり状態の二百人中約五十人の歩行を回復させた実績を基にしている。各大学病院、施設で行った治験でも、日常生活動作(ADL)レベルが落ちた例は一つも見られず順調な結果を残した。現在、いくつかの自治体から老人日常生活用具給付事業の対象用具として認定を受けるにいたった。

寝かせきりにしないシステムや機器が必要

昭和六十二年、滝沢さんは母で理学療法士である恭子さんと二人で同社を設立した。滝沢さんにとってこの事業は、三期務めた藤沢市の市会議員の座を捨てての思い切った転身だった。らくXは、そのとき恭子さんが考えたものだ。ただ、歩行器のみで突然、人が歩き出すわけではもちろんない。滝沢さんはここで、寝たきりの人が自立できる独自の用具を使った段階的なりハビリテーションシステムを考案していた。らくXは、そのシステムの要になる機器なのだ。

「議員時代に、歩けるのに寝たきりの状態にある人や、また様々な訓練で歩けるようになる人がいることを高齢者施設で見えました。施設をつくり、そこに高齢者を入れて終わりという方法ではだめで、自宅で歩いて過ごせる自立型のシステムが必要だと思っただけです」

滝沢さんは与えられるのを待つ「福祉型」ではなく、「自立型」の機器と、それを支える社会システムの必要性を強調する。「人間は四本足、二本足、杖を使う三本足と移行しますが、そこに歩行器を使う六本足の新しいライフステージを築くことを目指しています」

独自のシステムが機能したその先に、滝沢さんは新しい高齢者の生活像を見るのだ。



リハビリエイドの滝沢茂男さん

ソリ付き歩行器兼シャワーいす「らくX」。ソリを左右に揺らすようにして進ませる。二センチメートルほどの段差越えも可能になる

ご意見・ご感想は下記宛にお願いします。また、身近な看護・介護体験をファックスで募集します。
(株)コア「医療・看護特集」係
TEL 03(3384)8601
FAX 03(3384)8720